

大学の初年次教育調査

河合塾では、2009年度に、全国の国公立大学の全学部を対象に初年次教育調査を実施した。その内容をもとに、2009年12月から1月にかけて、大学を対象に「学生を変容させる初年次教育」というシンポジウムを実施し、今年6月にはそのシンポジウムの内容等を収録した『初年次教育でなぜ学生が成長するのか』（河合塾編、東信堂）を発行した。

今回は、河合塾の初年次教育調査の結果の概要と、「受動的な学習態度から能動的で自律的・自立的な学習態度への転換を促す」という観点で、評価の高かった大学の初年次教育の概要について報告する。なお、初年次教育調査の詳しい内容、各大学の詳細な取り組みの内容については、東信堂の書籍をご高覧頂きたい。

CONTENTS

- 概説：河合塾の大学調査から見てきたこと……P25
- 各大学の取り組み
 - ▶ 嘉悦大学……P28
 - ▶ 金沢工業大学……P30
 - ▶ 三重大学……P32
 - ▶ 高知大学農学部……P34

概説 — 河合塾の大学調査から見てきたこと

学生の態度変容を促す初年次教育

河合塾では、これまで大学選びの指針の1つとして「大学の教育力」に注目してきた。教育力においては、「初年次教育」がその鍵を握ると考えている。初年次教育の目的はさまざまであるが、今回はその目的として【図表1】の8つを定義した。

実際には、初年次教育の目的は、大学によってさまざまである。退学者の減少、友達づくりの支援、学力不足対策、スタディスキル（レポートの書き方など）習得など、多岐にわたっている。だが、共通する目標は、「受動的な学習態度から能動的で自律的・自立的な学習態度への転換」である。今回の調査では、態度の変換を促す取り組みを見るために、初年次教育の中でも、大学の正課に組み込まれている「初年次ゼミ」に注目し、それを中心に調査を実施した。

大学において態度の転換が必要になるのは、高校以前の段階で求められる知と、大学や社会で求められる知の性質が異なるからである。高校までの学びは、大学入試に大きな影響を受けており、その結果、生徒は、受動的に授業を聞き、「XはYである」という形の命題を暗記することが中心となっている。ところが、実際の社会で

【図表1】初年次教育の8つの目的

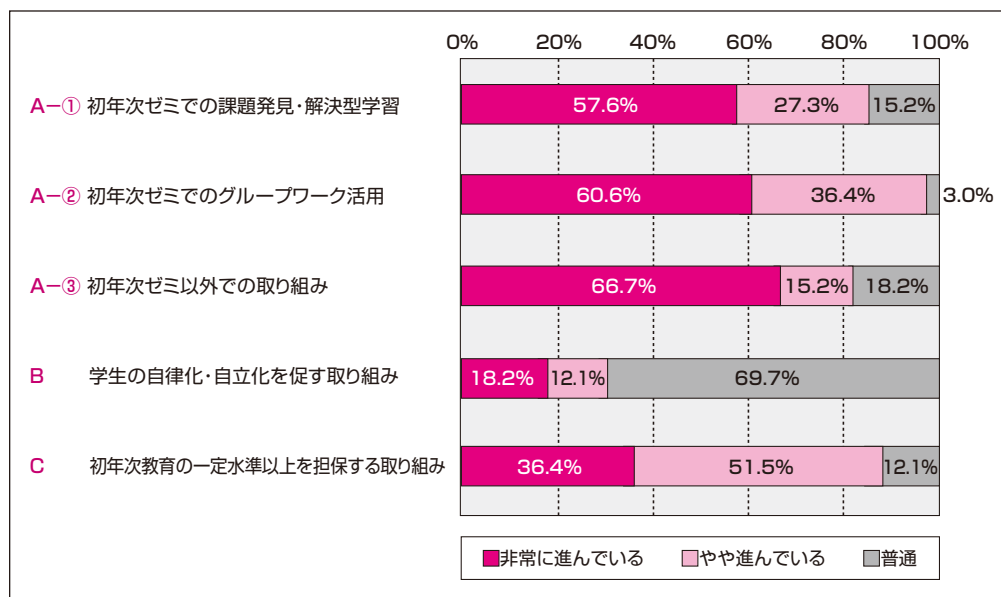
- ① 学生生活や学習習慣などの自己管理・時間管理能力をつくる
- ② 高校までの不足分を補習する
- ③ 大学という場を理解する
- ④ 人としての守るべき規範を理解させる
- ⑤ 大学の中に人間関係を構築する
- ⑥ レポートの書き方、文献探索方法など、大学で学ぶためのスタディスキルやアカデミックスキルを獲得する
- ⑦ クリティカルシンキング・コミュニケーション力など大学で学ぶための思考方法を身につける
- ⑧ 高校までの受動的な学習態度から、能動的で自律的・自立的な学習態度への転換を図る

（注）今回の河合塾の調査では、②③④の目的については除外し、⑤⑥⑦に関しては、大学の機能によって比重のかけ方が違うと考えている。すべての大学にとって共通の課題となっているのが、①+⑧であると考え、調査を行った。

（河合塾作成）

求められるのは、命題知を基礎にした実践知・活用知である。従って、命題知を社会の中で実際に活用できる知へと変容させていくことが、大学教育では求められているのだ。

【図表2】 実地調査を行った32大学・学部全体の評価結果



(河合塾作成)

この実践知・活用知は、能動的で自律的な学習を通して、はじめて身に付くものではないだろうか。そして、能動的・自律的な学習への転換は、一方向的な講義ではなく、双方向的、協働的な活動の中で実現される。その場が「初年次ゼミ」だと考えたのである。

アンケート調査に加え、実地調査を実施

調査にあたっては、まず、2009年5月に全国の国公私立大学の約2,000学部の学部長を対象に質問紙を送り、1,092学部（一部学科、全学機構を含む）から回答を得た（回収率54.6%）。質問では、学生の態度変容を促す教育として少人数で双方向型の「初年次ゼミ」を重視し、その設置状況や内容、実施体制を中心に聞いた。

次に、優れた取り組みを探すために、アンケート調査で評価が高かった大学・学部の中から、32大学・学部を抽出し、実地調査を行った。32大学・学部を決めるにあたっての考え方は次の通りである。

- ① 初年次ゼミが全員必修、もしくは90%以上の学生が履修し、必修と同等となっていること
- ② 1,092学部のアンケートを点数化。58点満点で平均が19.3点であることから、ポイントが30点以上の大学・学部を抽出した。

これに加え、さらに

- ③ 私立大学の場合は、入学定員が200人以上（中規模）の学部

- ④ 医・歯・薬・保健学部などの資格系学部については、医学部1大学、薬学部1大学のみ

とした。③については、まずは中規模の学部での初年次教育の可能性を見出したいと考えたからである。④については、医療系は教育目的が明確であり、教育プログラム、教育評価もある程度確立しているため、網羅的に見なくても、代表例がグッドプラクティスになり

うと判断したからである。

実地調査における3つの評価の観点

実地調査時には、以下の3つの視点で評価を行った。

視点Aとして、取り組みが「学生の態度変容を促すプログラム」になっているかである。これらについては、さらに、「課題発見・解決型の取り組み」の導入（A-①）、「協同学習としてのグループワークを十分に活用しているか」（A-②）、「初年次ゼミが、他の科目や在学4年間のゼミや研究室活動と有機的に関連づけられていたり、同級生や上級生の活用が意図的に行われているか」（A-③）の3つの視点を設定している。

視点Bは「学生が1人で成長していく自律化・自立化を促す取り組み」である。学生の面倒見がよいことは大切だが、それだけでは将来の仕事や研究に不可欠な「自律・自立」の資質の形成はできない。そこで、学生が1人でPDCA（計画・実行・評価・改善）サイクルを確立できるように支援しているかを見ることにした。具体的には、自己の成長や反省を言語化する「ふり返しシート」の有無と実施内容、学生に目標を設定させてその結果を検証させ、また次の目標を設定させる仕組みの有無などの項目である。

視点Cは「全学生に一定水準以上の初年次教育を担保する仕掛け」である。具体的には、指導マニュアルやガイドライン、共通テキストの有無、FD（ファカルティ・ディベロップメント、教員の教育力を高める組織的

な活動)の実施状況などの項目である。

以上の視点で、32大学・学部全体の評価結果をまとめたのが【図表2】であり、各大学の評価の一覧は【図表3】である。

「a 非常に進んでいる」との評価を3つ以上得たのは、岩手県立大学ソフトウェア情報学部など、16大学・学部である。これらの大学では、「学生の態度変容」のために、あえて厳しい経験をさせ、壁を乗り越えさせる工夫をしているのが特徴だ。例えば、正解が複数あったり、そもそも正解がないテーマを与え、1年生だけでなく、先輩学生や教員も一緒になって考えさせ、意見を出し合う取り組みをするなど、必ず1つの正解があることが前提だった高校までの学習との違いを考えさせている。

「全学生に一定水準以上の初年次教育を担保する」ために、例えば京都ノートルダム女子大学では、全クラスの初年次ゼミを同じ曜日・時限に設定し、終了後、毎回全教員が集まり反省と次回のすり合せを行っている。

しかし、【図表2】にあるように、全体的には「学生の自律化・自立化を促す取り組み」は遅れ気味で、教育サービスの充実を競い合う今日の大学が抱える課題も浮き彫りになった。

大学全体の改革につながる力を秘めた初年次教育

実地調査で明らかになったのは、初年次教育に熱心な大学ほど学生も教員もその成果を実感し、さらなる改革にも意欲的なことだ。同時に、学生の態度変容を促す教育は、大学教員には非常に困難で、試行錯誤の連続だとも言える。だからこそ、熱心な教員ほど学生と向き合い、その態度変容に直面する機会が増え、自らの意識改革も進むのだろう。

また、初年次ゼミは、多くの教員にとって専門ゼミでリーダーシップを発揮する優秀な学生の早期発掘の機会になっており、初年次教育に取り組む大学教員のモチベーションの1つになっているのは興味深い。

初年次教育は、教員の意識改革を促し、大学全体の改革につながる力も秘めている。だからこそ、志望校を決

【図表3】実地調査を行った32大学・学部の評価

大学(学部)	評価の視点				
	A-①	A-②	A-③	B	C
● 岩手県立(ソフトウェア情報)	a	a	a	a	a
東北福祉(総合マネジメント)	a	a	b	a	b
駿河台(経済)	a	b	a	b	b
大東文化(国際関係)	c	c	a	c	a
淑徳(国際コミュニケーション)	b	b	b	c	a
嘉悦	b	a	a	b	b
産業能率	b	a	a	c	a
清泉女子	b	b	a	c	c
多摩(経営情報)	a	b	b	c	a
玉川	c	b	c	c	b
神奈川	c	b	c	c	a
文教(国際)	a	a	a	c	a
● 信州(繊維・化学・材料系)	a	a	a	c	b
● 新潟(農・生産環境)	b	b	c	c	b
金沢工業	a	a	a	a	b
愛知学院(総合政策)	b	b	a	c	b
名古屋商科	a	a	a	b	a
星城(経営)	c	b	a	c	b
● 三重	a	a	a	c	b
同志社(法・法律)	a	a	b	c	b
京都ノートルダム女子(生活福祉文化)	a	a	a	b	a
京都文教	b	b	a	c	c
大阪成蹊(現代経営情報)	b	b	a	c	c
近畿(理工)	a	a	a	c	b
関西国際	a	a	a	a	a
神戸学院(薬)	a	a	a	a	c
● 愛媛(医)	a	a	a	c	b
● 愛媛(教育)	a	a	c	c	a
● 高知(農)	a	a	a	a	a
九州産業(経営)	c	b	c	c	b
長崎(工)	a	a	b	c	b
立命館アジア太平洋	b	a	c	c	b
日本文理	a	a	a	c	b

●は国公立大

評価 a…非常に進んでいる

b…やや進んでいる

c…普通

注：学部名が記載していない場合は全学での取り組み

評価の視点

A-① 学生の態度変容を促す取り組み(初年次ゼミでの課題発見・解決型学習)

A-② 学生の態度変容を促す取り組み(初年次ゼミでのグループワーク活用)

A-③ 学生の態度変容を促す取り組み(初年次ゼミ以外での取り組み)

B 学生の自律化・自立化を促す取り組み

C 初年次教育に一定水準以上を担保する取り組み

(河合塾作成)

めるにあたっては、初年次教育の実情やカリキュラムの設計に対する考え方に注目させたい。それには、履修要綱や講義概要(シラバス)を調べるのが有効だが、ほとんどが学内限定であり、学外からホームページ等で閲覧できる大学はそう多くない。せっかくの取り組みが外部に理解されないのはいかにも惜しい。大学の教育情報の公表も急務である。

嘉悦大学

「実践→認識→学習」の流れで学習意欲を向上させ
「未来履歴書」で自分の未来を描く中小企業で活躍できる人材の育成を目指し
初年次教育プログラムを体系化

2008年4月、加藤寛新学長就任を契機に、大学改革が進んでいる嘉悦大学の初年次教育は、【図表1】の科目が必修科目として設置されている。

嘉悦大学では、育成したい人物像を明確にするところからプログラム開発をスタートした。大学のある東京都の多摩地区は中小企業が多く存在し、地域に根ざした大学として中小企業に人材を輩出することを大学の使命と位置づけた。「自立自尊の人材」「中小企業のエースとなりうる人材」を目標に掲げる一方、中小企業は業務の専門化が進んでいないことが多く、「エース」となるには

【図表1】コア・プログラム

各科目の対象スキルを限定・明確化

科目名	聴く力	話す力	読む力	書く力
基礎ゼミナール	○	○		
コンピュータ入門 コンピュータリテラシ			○	○
アカデミック・リーディング			○	
アカデミック・ライティング				○

※上記の他に語学(英語・中国語)および体育(ボディ&フィットネス)を設置

【図表2】基礎ゼミナール

	前期プログラム	後期プログラム
1	イントロダクション	イントロダクション
2	カタリバ企画①	企画アイデア出し(個人)
3	カタリバ企画②	企画書の作成(グループ)
4	カタリバ企画③	事業計画書、工程表の作成
5	カタリバ企画④	収支予算書の作成→ 模擬店実施
6	コーチング・ファシリテーション①	事業報告書、収支報告書の作成
7	コーチング・ファシリテーション②	事業報告書、収支報告書の完成
8	ロジカル・シンキング①	プレゼンテーションの準備
9	ロジカル・シンキング②	プレゼンテーション大会
10	グループワーク①:ブレインストーミング	2年次ゼミナールの検討
11	グループワーク②:KJ法	専門科目エントリー①
12	グループワーク③:ディベート	専門科目エントリー②
13	未来履歴書の作成①	未来履歴書の更新
14	未来履歴書の作成②	未来履歴書の完成

何でもでき、かつ力強く業務を遂行する力が求められると考えた。

その上で、初年次教育を体系化し、トレーニングするスキルー「聴く力」「話す力」「読む力」「書く力」ーをどの科目で育成するかを明確にした。また、初年次教育のプログラムの検討にあたっては、「語り手」「キャリア教育」「コミュニケーション能力」「TeachingではなくTraining」という4つの観点が常に意識されている。

初年次教育のコア・プログラムは「基礎ゼミナール」である。「基礎ゼミナール」は、1クラス35～40名で、週1回の前後期を通して開講。他大学で初年次教育科目に含まれる創立の理念や大学生の心得などは入学ガイダンスで扱うことにし、その分、キャリア教育の要素が加わっている。表向きはコミュニケーション能力を中心にしたアカデミック・スキルを対象にしているが、裏に流れているのはキャリア教育で、二層構造になっている点に大きな特徴がある。

担当教員は30代中心で、人間的魅力のあふれる、学生のロールモデルとなるような教員が配置され、また、各クラスに1名付くSA(ステューデント・アシスタント)も、ロールモデルとなりうる先輩学生が配置されている。

先輩や同級生との語り合いを通して
未来の自分を描く力を身につける

基礎ゼミナールのプログラムは【図表2】のような内容である。第2～5回は、NPOカタリバと共同で行う「カタリバ企画」を実施。NPOカタリバは、大学生による高校生のキャリア教育を支援している団体で、このプログラムは、大学の先輩が大学の後輩に教えるという内容である。「語り手」として大学教員よりも先輩学生の方が適切な場合もあるという観点から、このようなプログラムが導入されている。学生が小グループに分かれて、先輩学生が過ごしてきた生活を聞きながら自分自身について振り返り、最後は今後の目標などを紙にまとめて発表すると

いう内容だ。新入生に「火をつける」うえで、極めて大きな効果をあげている。

第6・7回の「コーチング・ファシリテーション」は主に傾聴のトレーニングを、第8・9回の「ロジカル・シンキング」は聴く・話すための前提となる力についてのトレーニングである。どちらも講義は冒頭の20分で、ロールシミュレーションを通じた学生同士のトレーニングに重点が置かれている。

ロジカル・シンキングは、友達同士で行ったインタビューをノートにまとめ、ロジックツリーに落とし込むという内容だが、インタビューの内容が、すべてキャリアに関するものである点がポイントである。「大学生活で必ず達成したいことは何ですか」などの問いに互いに答え合うことによって、自分の興味が明確化されると同時に、友達から聴いたことが自分のキャリアを考える1つの素材となっている。

その後の「グループワーク」は、後期に行う学園祭での模擬店演習に備えて、ブレインストーミングやディベートの手法を身につけながら、学生が各店舗の商品・サービスを決定する。

「未来履歴書」で力強く未来の自分を描く

前期の最後に、授業を通じて自分のキャリアについて考えた内容を「未来履歴書」に書かせている。未来履歴書は2枚で、1枚には春休み・春学期・夏休み・秋学期と学生生活を4つに分けて、それぞれで何をするかを書く。もう1枚は就職時のエントリーシートを模したもの。「自身を一言で伝えたい」と「学生時代に特に力を注いだこと」などについて書き、就職活動が本格化する3年次11月における自分をイメージする内容である。

なお、作成の際には5～6名の学生に1名の先輩SAが付き、自らの経験を踏まえた具体的なアドバイスをしている。「未来履歴書」を書くことについて、初年次教育プログラムの担当責任者を務める杉田一真学長補佐（キャリア担当）は、「自分の未来を描けば充実した未来はありません。力強く未来の自分を描く力を身につけてもらいたいというのが、基礎ゼミナール前期の裏の目的です」とその狙いを説明する。

後期は、2年次以降の専門科目の学習に近づけることを意図したプログラムが設置されている。

後期の授業では、学園祭での模擬店の出店演習がある。店舗経営を通じて経営の基礎を体験することが狙いであ

り、授業では、事業計画書や収支予算書など実際の事業で必須となる書類も学生が作成する。出店後は、決算などの結果についてプレゼンテーションを行い、グループ間での相互評価の結果に応じて表彰を行うなど競争意識を高める工夫もしている。また、第10～12回の講義では2年次のゼミ選択を意識しつつ、専門科目への橋渡しをし、最後にもう一度未来履歴書の更新をする、というのが後期の授業の概要である。

「実践→認識→学習」の流れで 学習意欲を向上させる仕組みをつくる

ところで、嘉悦大学では基礎ゼミナールのプログラム全体を通じて、学習の前にまず実践（体験）することが重視されている。その理由について、杉田学長補佐は、「一般的に、教員は実践ではなく啓蒙によって学生たちに問題意識を持たせようと考えがちで、『啓蒙→認識→学習』の順番で講義を構成する傾向があります。しかし、これでは学生たちには響かず、また、学生の知識・スキルに対する枯渇感がないと学習意欲の向上は望めません。実践して、はじめて自らの知識・スキルについて問題意識を持つことができ、これが学習意欲につながります。従って、『実践→認識→学習』の順番でプログラムを構成する必要があると考えています」とその意図を説明する。

そうすると、初年次教育でのキャリアデザインや動機付けの後、学習した内容をもう一度実践する場が必要になる。そこで、授業外でも、多様なキャリア形成の機会を提供している。例えば、2009年には学生自身が運営をする学内人材派遣センターを開設し、学生スタッフをキャンパス内の仕事に有償で派遣している。また、「学友会」という学生組織では、イベントの企画やフリーペーパーの発行を行っている。活動には予算書の提出が義務づけられているので、学生たちは活動を通じて、簿記・会計などの知識の必要性を認識する。

これらの取り組みの結果、学期中に退学する学生が4年間で年間81名となっていたが、初年次教育の改革をはじめとした大学改革の結果、2009年度の春学期は1～4年生までを含めて退学者がいなくなったという^(注)。

加藤寛学長は「楽しくなければ大学ではない。楽しいだけでも大学ではない」というスローガンを掲げ、この2つの両立を目指して大学改革を進めている。杉田学長補佐は、「今後も入学してきた学生に火をつけるとともに、火のついた学生の希望に応えられる環境づくりに努めていきたいと思っています」と締めくくった。

(注) 退学者の減少には、学生の「居場所づくり」も貢献していると大学では分析している。例えば、学生のたまり場になるようなラウンジを開設し、24時間開放してキャンパスに居残って勉強できるようにしたり、自由に机を組み合わせられるようなグループワーク用の特別教室を作った。同時に、「家族主義」を掲げ、同期との関係、先輩との関係、教員との関係を密にしている。

金沢工業大学

5種類のポートフォリオを活用して 学生の大学生活をより有意義にし、将来展望の構築を促す

大学教育適応支援促進科目として 初年次教育科目を展開

金沢工業大学では、1995年以降、本格的に初年次教育を意識し始め、1995年に修学アドバイザー制度、ノートPCの所有義務化、2004年度には「基礎教育部」を設置し、ポートフォリオシステムを導入している。金沢工業大学の初年次教育は、基本的に人間形成・社会性などに力点を置いている【図表1】。いわゆるスタディ・スキルよりも大学生に求められる一般常識や態度といったスチューデント・スキルにやや重きを置いているのだ。もちろん理工系大学のため、スタディ・スキルも重視しているが、それは初年次教育科目群ではなく別個の科目群に配当している。

初年次教育科目である「技術者入門」「人間と自然」「修学基礎」の3科目の教育を担っているのが基礎教育部（注1）である。これらの科目は、2004年度から必修科目としてスタートし（注2）、全学で統一したシラバスを作成し、評価基準も同一である。その他、情報リテラシー、専門課程への導入としては、「基礎数理」「基礎実験」「プロジェクトデザインI」「コンピュータ基礎演習・同演習」などがある。多くの大学で行われている「基礎ゼミ」の内容を複数科目として展開しているところに、特徴がある。

3科目のうちの「技術者入門」は、自立した技術者になるための心構えを説く科目で、1年次の夏に始まる。特徴は全担当教員が企業出身者であること。毎週、1週間の新聞を読んで10大ニュースを記す「週間レポート」が課されている。この授業は、専門家が1年生に対して行う、技術者に対する理解を深める導入教育である。

「人間と自然」は、1～3年次の必修科目で、学外研修施設を使った計6泊9日の合宿研修である。海洋調査、海洋訓練のほかグループ討議やプレゼンテーションを行い、1年次では特に仲間作りが意識されている。

【図表1】
2010年度 大学教育適応支援促進科目群

スタディ・スチューデントスキル、自校教育、 キャリアデザイン、人間力の基礎	
技術者入門 技術者入門ⅠⅡⅢ (3)	技術者になるための自覚と意欲
人間と自然 人間と自然ⅠⅡⅢ (3)	社会人になることの自覚と意欲
修学基礎 修学基礎ⅠⅡⅢⅣ(4) コアガイド(1)2年次	金沢工大生としての自覚と意欲

大学生としての行動を意識させる 科目としての「修学基礎」

金沢工業大学で、すべての基礎を作る科目とされているのが「修学基礎」である。1年間を通してクォーター制で「ⅠⅡⅢⅣ」を履修する。

「修学基礎Ⅰ」（前学期春）では、学生部長や学長による講話のあと、文章作成法やグループ討議法についての講義と演習を行う。「Ⅱ」（前学期夏）は教務部長による大学生としての学習姿勢の講話や、プレゼンテーションの基本技術に関する講義と演習などを行う。専門科目の履修が増える「Ⅲ」（後学期秋）では進路部長とゲストスピーカーによるキャリアデザインについての講話【図表2】、「Ⅳ」（後学期冬）では自己開発センターによる資格取得の講話などをもとに、グループで所属している学科の研究室に関する調査を発表し、2年次以降のキャリア設計を各自で作っていく。

学生部長の藤本元啓教授は、「特に大事なことは、学生に1日、1週間、1学期間、1年間という時間の区切りを意識させることです。学生の自己管理とタイムマネジメントは、1年間を通して課題として出される『修学ポートフォリオ』を活用して習慣づけます」と、自己管理の重要性を強調する。

「修学基礎」は将来を通じて特殊なスキルを身につけるというより、学生が自分自身を再確認し、大学生としての行動を意識することを促す科目と位置づけられ、そのツールとしてポートフォリオが活用されているのだ。

学生の行動履歴に教員がコメントして 手渡しで返却

金沢工業大学のポートフォリオは、【図表3】のよう

【図表2】
2010年度 修学基礎Ⅲ（後学期秋）の内容

キャリアデザインを意識して専門領域を理解し、
学習計画を設計することによって、基礎領域の
重要性を理解する

- 1回：進路部長講話「キャンパス・キャリアデザイン」
- 2回：ゲストスピーカー「キャリアデザインとは」
- 3回：研究室調査に関する準備
- 4回：研究室調査と進路選択①
- 5回：研究室調査と進路選択②
- 6回：研究室調査のグループ発表
- 7回：修学アドバイザーによる自由講義・演習
- 8回：自己点検授業、修学基礎Ⅳガイダンス

Kawaijuku Guideline 2010.9 31

三重大大学

4つの教育目標の定着のため、自己省察を繰り返しながら 能動的に学習する習慣を身につけるプログラムを構築

4つの教育目標を定着させ 能動的な学習態度へ転換させる初年次教育

三重大大学は、「感じる力」「考える力」「コミュニケーション力」、それらを総合した「生きる力」という「4つの力」を身につけることを教育目標に掲げている。2009年度から全学1年生を対象として「4つの力スタートアップセミナー」という初年次教育を開始しているが、まずはスタートアップセミナーを実施するに至った背景について、見てみよう。

三重大大学は第1期中期目標期間（2004～2009年）に、「PBL（問題発見解決型学習）による教育を全学的に展開することで、4つの力を伸ばす」という目標掲げた。さまざまな取り組みを推進してきた結果、2009年度には専門・共通教育を合わせて400科目以上のPBL授業が設置された。また、PBLを効果的に実践するために、授業の前後に学生同士が課題についての情報を共有するために、ムードル（Moodle）という学習管理型eラーニングシステムを導入した。さらに、「4つの力」を定量的に測定する「修学達成度評価システム」を作り、毎年、それぞれの力の伸びを一人ひとりチェックできるようにしている。

さらに学生を伸ばすためには、「各々の授業を履修することによって、自分はどのような力を身につけたいのか」という明確な目的を各自に持たせることが必要であると考えた。そのためには、1年次で「4つの力」そのものへの理解を深め、自己省察を繰り返しながら学習する習慣を身につけさせる、全学共通の統一された初年次教育の導入が効果的であるという見解に到った。

そこで、高等教育創造開発センターが中心になって、学生に教育目標を定着させ、能動的な学習態度への転換を図り、アカデミックスキルを身につけることができる初年次教育を立案・実施することになった。その結果、2009年度より全学部共通の「4つの力スタートアップセミナー」が開始され、2010年度には5学部中4学部で必修科目となっている。

「4つの力」スタートアップセミナーで グループ学習を通して能動的学習を推進

「4つの力スタートアップセミナー」のポイントは、

①「4つの力」への理解を深める、②情報リテラシー・レポート作成などのアカデミックスキルを獲得する、③グループ学習を通して能動的学習を推進する、④プロジェクト遂行を組み合わせた実践的学習を行う——の4点である。

また、授業の基本要素として、ディスカッション、講義、グループプロジェクトを必ず含むことにした。1クラス約40名を、約4名で構成されるグループに分け、毎回同じメンバーでディスカッションを行う。講義は10～15分程度で、毎回の講義の内容は、プロジェクトの進行に合わせて展開している。今回のグループプロジェクトのテーマは、「三重大大学の魅力」とし、「高校生を相手に、自分の高校に戻って三重大大学の魅力をプレゼンテーションするつもりで」と働きかけた。

【図表1】は15回の授業テーマである。1～4回目は学生がグループ学習に慣れることに重点を置き、5～14回目にはディスカッションにプロジェクトが加わる。5～12回までは、最後の約20分をプロジェクトに当て、13・14回目には、クラスでプロジェクトの発表を行った。

1回の授業の時間配分は、【図表2】の通りである。5回目からは、「活動②」がグループプロジェクトの「三重大大学の魅力を紹介する」となるが、毎回約20分程度しか時間を割くことができないこともあり、プロジェクトの内容としては入門レベルである。共通教育において、本格的なプロジェクトに取り組みたい場合は、PBLセミナーなど他の授業が準備されており、「4つの力スタートアップセミナー」のプロジェクトは、「全員が必ず一度はプロジェクトに携わるようにしたい」というボトムアップ的な性格のものとした。

毎回の授業が終わった後には 「どんな力が身についたか」を考えさせる

具体的に授業の内容を見てみよう。例えば、プロジェクトが始まる第5回目の授業では、最初に「今日の授業ではプロジェクトのテーマの設定を行います」と、今回のテーマを提示し、教員が「グループのメンバーが個々人で、あるいは分担して集めた情報をもとにアイデアを発想し、得られたアイデアを1つのテーマに絞っていく

【図表1】スタートアップセミナー 各回授業のテーマ

作業のやり方について扱います」と学習目標について説明する。

事前に、「皆さんが考える三重大大学の魅力をいくつか書いてきなさい」という宿題が出されているため、まずはその内容を学生グループで共有する。その後はテーマ探しに入り、出てきた内容を再び情報共有する。授業の後半は具体的に紙にラベルを貼り、KJ法を使って、今回の授業の目標であったテーマの設定を行う。

授業の最後に、各グループで集まって、「今回の授業で自分たちはどんな力がついたか」を、リフレクションシートに記入して振り返る。

リフレクションシートには、例えば、教育目標の1つである「考える力」の構成要素としては「批判的思考力」「課題探求力」などと、4つの教育目標に結びつけて細かく設定されている。学生は、「今回自分たちは批判的思考力をつけたから、ポイントは4つつけよう」等話し合って記入する。そのほか、グループ全体として、今週のまとめとレベルアップのための課題を整理し記入する。さらに、グループメンバーそれぞれの氏名を書いて記入する部分には、課外学習時間、学習（準備）してきた内容も書き、毎回提出させている。

中川正副学長は、「このように14回にわたってリフレクションを繰り返すことで、『4つの力』に関する理解を深めると同時に、学生にリフレクションを習慣づけるようにしています」とその狙いを説明する。

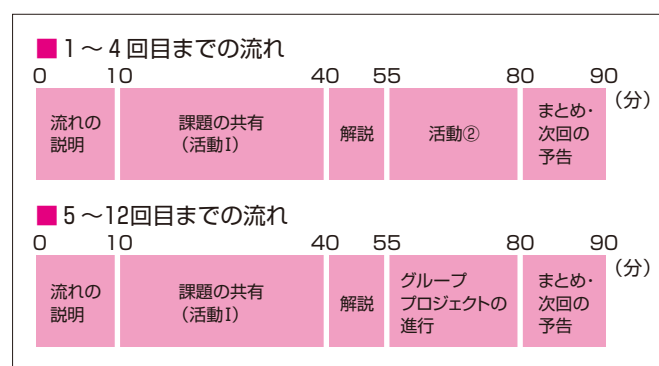
協調性やコミュニケーション力について 受講者と非受講者で違い

スタートアップセミナーの効果はどうか。受講者のみの調査であるが、社会的スキルは向上していた。また、2009年度は選択科目とした学部もあったため、受講者と非受講者で自己評価の変化を比較することができ、それによれば、「人と一緒にやるより、個人でやるほうがいい」という志向を表す数値は、非受講者では上がっていたが、受講者は変化していなかった。同様に、「一緒にやるのはもう嫌だ」という志向を示す数値も、非受講者のみが上がっていた。このように、協調性やコミュニケーション力は、受講者と非受講者で違いが出ていることがわかった。

各回授業のテーマ		プロジェクトの進行と講義内容の対応	
1 導入:大学の学びへの招待	8 情報の検索	講義内容	プロジェクト進行
2 グループ活動	9 情報を読み解く(1)	5 テーマ設定の仕方	ブレインストーミングなどによりテーマを探索する
3 聴く方法、情報のまとめ方	10 情報を読み解く(2)	6 大学での学び	
4 意見を述べる方法	11 レポートの書き方	7 ものの見方・感じ方	プレゼン対象の完成を考慮したテーマ設定、情報収集を行う
5 テーマ設定の仕方	12 発表の方法	8 情報の検索	
6 大学での学び	13 プロジェクト発表と評価(1)	9 情報を読み解く(1)	提供する情報の質と価値を精査する
7 ものの見方・感じ方	14 プロジェクト発表と評価(2)	10 情報を読み解く(2)	
	15 振り返りと今後への展開	11 レポートの書き方	プレゼン内容に構造と論理的まとまりをもたせる
		12 発表の方法	受け手を考慮した情報提供の流れを考える

グループプロジェクト

【図表2】スタートアップセミナー 基本的な授業の流れ



また、スタートアップセミナーの中間評価と最終評価における自由記述では、肯定的な意見として、「少しずつだが自分の意見を主張する勇気などが増していった」など、コミュニケーション力がついたという意見が圧倒的に多かった。その他、「授業の振り返りや、ムードルによる課題の提出があったので、計画性が身についた」「ある物事について深く考える時間が増えた」なども挙がっていた。

その他の成果として、中川正副学長は、「やはり友達を獲得したということが大きいと思います」と成果を語り、続いて、「不適応傾向学生の発見と対処ができるようになりました。その結果、『学生なんでも相談室』の専任カウンセラーと相談して個別対応を取り、親や担任の先生とも相談できる体制が整いました」と予想外の効果についても語った。

今年度から、PDCAサイクルを作るために、スタートアップセミナーと同様に、各授業で学びの振り返りシートを導入するなど、自己査察を繰り返し、能動的な学習を身につける試みが全学的に広がっている。

高知大学農学部 学生へのアンケート調査や実態調査をもとに 初年次教育を構築 3つの基軸科目ではグループワーク中心に授業を展開

大学基礎論、学問基礎論、課題探求実践 セミナーを軸に初年次科目を展開

高知大学は1997～1998年にかけて共通教育の改革を行い、この10年間の一定の成果を基礎に、2008年から新たな初年次教育を構築する試みを続けている。

初年次教育の構築にあたっては、2002～2004年に実施した「新入生の意識調査アンケート」と、2005年に教職員を対象に行った「学生生活実態調査」を参考にした。この調査によると、「コミュニケーション能力の不足」という認識は学生側・教員側で一致していた。違いが見られたのは、やる気に関する項目である。教員は「最近の学生は無気力で勉強しない」と感じているが、新入生の75%は「素養を修得できるなら苦手なことでもチャレンジしたい」と答えていた。

こうした調査結果を受けて、教育改革の基本方針として、「学力だけでなくマインドを重視した初年次教育を強化する。学問的アイデンティティを確立させる。社会の要請に応える教育プログラムであるキャリア教育を導入する。効率的な担当システムを構築する」を掲げ、共通教育科目を改革。2008年以降の初年次科目（共通教育科目・必修12単位）のうち【図表1】、「大学基礎論」「学問基礎論」「課題探求実践セミナー」「情報処理」では、グループワークを大幅に取り入れている。

各科目の役割・目標は【図表2】の通りである。入学直後の1年次前期の「大学基礎論」では、学びの見直し

をつけさせることに重点を置き、1年次後期の「学問基礎論」では、学問的関心（理論的、多面的に考える力）の養成に重点を置き、1年次後期または2年次前期に履修する「課題探求実践セミナー」では、学びの転換（主体的に探求する力）や、本当の意味でのコミュニケーション能力を磨くことを主な目標としている。

以下、これら3つの科目について、その取り組みを見てみよう。

将来像の意識付けを行う「大学基礎論」

「大学基礎論」の教育目標は、①「教えるから学びとる」という学びの姿勢の転換、②自分の将来像についての意識付け、③高知大学の存在意義の理解、コミュニケーション能力の向上——である。教育内容としては、全学共通テーマである「大学で学ぶとは」「地域社会はどんな力を求めているか」「国際社会における高知大学の役割と意義」の3つを設定。教員による講義の後、学生のグループワークを行っている【図表3】。

具体的には、農学部の学生を60名ずつ3クラスに分けて、各クラス3名の教員で指導。グループワークは5～6名に分かれて行う。全15回の授業のうち、1～2回目が講義とオリエンテーションであり、その後はグループワーク→プレゼンテーションに取り組む。プレゼンテーションでは、グループ同士での相互評価も実施する。「大学基礎論」では、学期の最初と最後に学生自己分析

シートを書かせている。これを書く

ことも、学生の変容を促すための重要な仕組みであり、以下の5つの狙いがある。

- ① 学生に授業の狙いを理解してもらうこと
- ② 入学時における

【図表1】初年次科目の内容

科目区分	授業題目等
初年次科目 【12単位】 ※必修	大学基礎論 課題探求実践セミナー 大学英語入門 英会話 情報処理 学問基礎論
教養科目 【22単位】 ※5分野から 3分野以上 選択必修	4分野（人文、社会、生命・ 医療、自然） 外国語分野 （英、独、仏、中、韓、西）
共通専門科目 【18単位】 ※選択必修	基礎科目 キャリア形成支援科目

【図表2】初年次科目における3題目の役割・機能比較

区 分	大学基礎論 （1年次前期）	学問基礎論 （1年次後期）	課題探求実践セミナー （1年次後期または2年次前期）
学びの転換 【主体的に探求する力】	○		◎
学びの見直し 【自己評価力（省察力）】	◎	○	
学問的関心 【理論的、多面的に考える力】		◎	○
社会的関心 【社会的使命感（謙虚さと責任感）】	○	○	○
協働への関心 【真のコミュニケーション能力】	○		◎

※ ◎は主となるものを示す

る自分自身を認識させること

- ③ 自己認識と自己成長を意識させること
- ④ 授業を通じて意識変化や気づきがあったかを把握すること
- ⑤ 学生が円滑に大学生活に移行できているかを把握すること

質問項目は2回とも同じ内容のため、学生の変化を読み取ることができる。「グループや仲間たちと何かをしようとする時、自分の考え方や意見を相手に理解してもらえるように話ができるか」という問いに対しては、「強くある」「ある」と回答した割合が、20.3%から59.9%に増加。「これまでの自分の思考や態度を振り返り、自分をさらに高めていこうという意欲や決意はあるか」という問いに対しては、53.1%から84.2%に増え、学生の変化を実感できる数値となった。

一方、教員も担当教育活動記録シートに記録している。教員の意見としては、「グループワークの重要性は認めるが、その基礎は、講義によって学生の資質向上を図ることではないのか」「グループワーク、コミュニケーション能力の訓練などは、新入生よりも上回生で課したほうがよいのではないか」などが挙げられた。

今後の授業について、高知大学農学部農学科の岩崎貢三教授は、「学生の自己分析結果からは一定の成果が見られるため、教員の意見も参考にしながらこのような形式で実施していますし、今後も改善を加えながらこのような形で授業を進めていくことになると思います」と語る。

専門教育に対する導入教育としての「学問基礎論」

ところで、高知大学農学部農学科には8つのコースがあり、一般入試で入学した120名の学生は1年末にコース分属を行う。1年次後期に開講される「学問基礎論」は、コース分属の直前に位置し、専門教育にむけての導入教育を行う上で重要な位置を占めている。

全授業のうち、最初の5回は「農学入門」と題し、日本の農政・農業に関する問題点についての講義を行う。農政局の担当者が食料・農業・農村をめぐる情勢について講義したり、8コースの主任である大学教員がそれぞれのコースで学ぶ内容を説明したりする。

「農学入門」の後は、各コースが主催する8つの分野別演習の中から2つの分野を選ぶ。それぞれ5回にわたって、1グループ4～5名に分かれてグループワークに

【図表3】2010年度の授業計画

回	内 容	授業形式*
第1回	オリエンテーション、授業計画の説明、グループ分け、学生自己分析シートの実施	合同講義1
第2回		合同講義2
第3～5回	「大学で学ぶとは? (農学部で何を学ぶか)」	演習
第6回		プレゼンテーション
第7回	振り返り・レポート作成指導	合同講義3
第8回		合同講義4
第9、10回		演習
第11回	「社会が求める力と高知大学の役割」	プレゼンテーション
第12回		合同講義5
第13、14回	「国際社会における高知大学の役割と意義」	演習
第15回		プレゼンテーション
第16回	振り返り・レポート作成指導・総括、学生自己分析シートの実施	合同講義6

*1年生180名を60名ずつの3クラスに編成し、演習では、5～6名のグループごとにチームビルディング、グループワークを行う。合同講義は、3クラス合同で受講する。

参加し、プレゼンテーションやディベートを行い、相互評価、振り返り、レポート作成を行う。その際、学生の第一希望コースが必ず含まれるようにしているのがポイントである。その結果、2009年度は85%の学生が第一希望コースに、残り15%の学生も第二あるいは第三希望コースに分属している。

さらなる能動的・主体的学習の促進を目指す「課題探求実践セミナー」

1年次後期または2年次前期の「課題探求実践セミナー」は、「大学基礎論」での学びの転換を受けて、さらに能動的・主体的学習を促進することが目標である。

「農学における生物資源」「農学における環境」という2つのテーマにおいて、講義の後、チームビルディング→グループワーク→プレゼンテーション→振り返りを行っている。この科目でも振り返りやアンケートを実施しているが、「大学基礎論」と比べると伸び率はあまり高くない。その理由について岩崎教授は、「グループワーク形式の授業も3回目となり、学生が自分自身に求めているレベルがかなり高くなっていることが、まず1つ考えられました。もう1つは、グループワークで取り組む題材が、以前のものと重複していることがあり、これは今後の検討課題だと考えています」と述べている。

以上、学生を変容させる初年次科目として、3つの科目を中心にきてきた。初年次科目全体の課題としては、学生の自律促進にかかわることとして、いかにPDCAサイクルを回していくかが挙げられている。今回、紹介していない「情報処理」では、振り返りやラーニングポートフォリオによって自己評価を行い、次の目標設定につなげている。この仕組みを他の初年次科目に適用できないかという観点で、改善を図ることを検討し、さらに初年次科目の充実を目指している。